



Title	枕草子三巻本「たちはたまつくり」について
Author(s)	林, 和比古
Citation	語文. 1973, 31, p. 3-11
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68605">https://hdl.handle.net/11094/68605</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

(一一頁より続く)

所以隔内外也」名義抄「壘・壁ソコ」(大日本国語辞典)

注5 渡辺久雄氏の古代近畿想定図(小学館発行、日本古典文学全集「万葉集」1の口絵。氏は8世紀ごろを目途してこの地図を作成)によれば、山城川(淀川)が難波浦で大きくひろがり、河口の島々と、南から北へ向って半島のやうに突出した上町台地との間に大きな入江を作っている。上町台地の西方はもちろん現在のやうに海であるが、東方もまた入江で、それが生駒山の麓の方までひろがっている。現在も草香江、深江・若江・小若江のやうな名称が残っているのはその名残である。玉造はその半島の東岸にあり、玉造江が摂津にあったとすれば、それに面した江だと考へられる。玉造は難波宮(現在の大阪城の位置)の南口にあり、そこから奈良へは暗峠越えの直越で結ばれ、その出発点にあたり、恐らく玉造江を舟で渡ったものであらう。そのあたりがおそらく平安末ごろから自然と人為の両方で徐々に陸地化したものであらう、現在はもちろん一帯の陸地で、地名にのみ「何々江」の名称を残してあるにすぎない。

本稿―特に注5については井上薫・井上實・清原和義諸氏の示教に負ふところが多い。あつくお礼を申し上げます。

(本学名誉教授)